

# 『失敗の本質』と戦略思想

を読んで

柴田 幹雄 陸自75

本書は、84年に出版されたロングセラー『失敗の本質―日本軍の組織論的研究』（以下、『失敗の本質』）の共同著者の一人、杉之尾宜生氏が、気鋭の「孫子」研究者西田陽一氏とともに著したもので、いわば『失敗の本質』の続編ともいえる著作である。

『失敗の本質』は大東亜戦争の作戦戦略の規模の戦いについて、組織論の視点から分析したものだ。本書はこれらの戦いを、孫武の『孫子』とクラウゼヴィッツの『戦争論』を鏡にして映し出し、政戦略的の視点で分析している。さらには、大東亜戦争開戦経緯、本土決戦構想と終戦経緯をとりあげ、外交と軍事の視点で、日本陸海軍は外交と軍事をどのように見ていたのかを述べている。またガダルカナル作戦、インパール作戦、ミッドウエー海戦などの戦いを取り上げ、大東亜戦争全体の中での位置づけ、戦争の帰趨に与えた影響など、『孫子』『戦争論』の記述を手掛かりに、戦術的でなく戦争指導の視点を持って各戦域の作戦を分析している。

そのうちの一つ、ノモンハン事件について、本書では、作戦について論ずる以前の問題として、当時の日本陸軍が軍事力行使についてどのような考えを持っていたかに焦点を当てている。

そして関東軍作戦課参謀の辻少佐が起草した「満ソ国境紛争処理要綱」に目をむける。国境紛争は極めて政治的、外交的に微妙な問題で、こじれば本格的な戦争にもなりかねない。それをあたかも師団の遭遇戦の作戦指導のような視点で記述していることに驚く。

本書では、「そもそも、政治が軍事行動の枠を決め、政治目的達成のための軍事力である」という発想が、当時の軍人には希薄であったとし、その原因を「統帥綱領」に求めている。綱領冒頭の「統帥の要義」には、軍事行動について政治目的などから完全に独立して作戦を行ってもよいとも読めるような記述である。これは現代の常識では異常とも思えるが、『孫子』『戦争論』から見てもやはり異常である。

本書のセールスポイントの一つでもある「大東亜戦争開戦経緯」を見てみよう。『統帥綱領』の記述が軍事的領域に限られるのに対して、『孫子』『戦争論』は外交という領域を踏まえて戦争・武力戦を論じている。

『孫子』では「故に、上兵は謀を伐つ。其の次は交わりを伐つ。其の次は兵を

伐つ。其の下は城を攻む」(最上策は謀をもって敵の戦意を無力化し、次は同盟を崩壊させて孤立化させ、次の策は武力戦を戦う。最悪は敵の準備した陣を攻撃することである)とのべている。あたかも現代のハイブリッド戦を予言しているようだ。現在の中国の南シナ海、尖閣諸島などでの動きなどを見ると、当事国が戦争であると気付く前に、既成事実を作り戦意を無力化する動きをしているように見える。さすがに『孫子』の国であるなどと感心してはいられない。

では日本は当時どう考え、開戦したか。欧州正面のドイツの快進撃に幻惑され、「時局処理要綱」を作ったものの、情勢を都合よく解釈している感もあり、米英と腰を据えて戦おうという決意は読み取れない。更に陸軍は海軍に引きずられたばかりか、軍事と外交がちぐはぐなまま開戦に至った。ここで本書では『戦争論』の「戦争によって、また戦争において何を達成するかを知らずして、戦争を開始する者はいないであろう」という言葉を引いて、始めた戦争の終わらせ方、エンドステートの問題を扱っている。開戦に先立ち陸海軍の指導者たちはエンドステートをきちんと描き、開戦に踏み切ったのだろうか。これについてはいまだに明確な回答は出ていない。

本書は、ここで「対米英蘭蔣戦争終末促進二関スル腹案」を取り上げている。これをもって、グラッドストラテジーに基づく戦争計画に相当するもので、エンドステートはあったとの主張もある。本書ではこれに対して、「腹案」はエンドステートに向けての戦争終末構想は全く含まれていない。「武力戦指導構想」ではあっても「戦争指導構想」といえるものではなかった、としている。その説明は是非本書を手にとってご確認いただければと思う。

中国と、尖閣・南西諸島をめぐる武力戦が起こった時、日本の防衛戦争のエンドステートは何なのか。侵攻勢力を撃破、排除するだけなのか。もしそうだとすれば結局今の自衛隊も武力戦だけを考える『統帥綱領』の時代と同じではないか。我々の学んだ『野外令』にも、侵攻勢力排除後の終戦構想のことまでは書いてなかったように思う。日本政府に南西諸島への侵攻を排除した後の東アジア新秩序構想までなければ作戦・戦争指導が一貫したものにならない。ではどうするか。『野外令』以上の世界は自学研鑽にかかる部分が大いだろう。

幹部自衛官はすべからず、本書『失敗の本質』と戦略思想から、『孫子』『戦争論』の戦争指導のありようのように思いを馳せ、研鑽を積んでいかなければならないと今更に思う。